(p＝0.12), 膀胱の D2cc は ICRU の膀胱線量より有意に高値であった (p＜0.001). 【結　語】 従来の ICRU の線量評価点では, 直腸線量は比較的適切に評価されていたが, 膀胱線量は過小評価されている可能性が示唆された.

4．子宮頸癌放射線治療の直腸パラメータと晩期直腸障害の検討

北本　佳住，樋口　啓子，岡本　雅彦
牛島　弘毅，玉木　義雄
（群馬県立がんセンター　放射線科）

【目　的】 子宮頸癌放射線治療の直腸パラメータと晩期直腸障害の関連性を遡及的に検討する. 【対象と方法】 当施設で子宮頸癌に対して外照射と低線量率腔内照射で治療した 44 例を対象とした. ICRU の reference point の線量, 最大照射線量, 直腸の D01cc, D1cc, D2cc, 直腸壁の D5cc, D10cc をパラメータとした. 直腸の晩期有害事象は CTCAE v3.0 を用いて評価した. 【結　果】 44 例の直腸障害は, Grade 0 : 23 例, Grade 1 : 15 例, Grade 2 : 3 例, Grade 3 : 3 例であった. 出血の有無で分けた場合に, D01cc, D1cc, D2cc において両群間に有意差を認めた. 【まとめ】 子宮頸癌の放射線治療において直腸パラメータは晩期直腸障害の予測因子となる可能性がある.

〈一般演題 II〉

座長：井上エリ子（群馬大医・附属病院・看護部）

5．放射線治療を望んだ食道がん患者の治療に対する思い・考えを知る

市川　佳孝，井上エリ子
（群馬大医・附属病院・北 6 階病棟）
中島　陽子
（群馬大学重粒子線医学研究センター）

【目　的】 放射線治療を選択した食道がん患者が, 放射線治療を選択した経緯とどのような気持ちで治療に臨んでいるのかを知ること. 【方　法】 食道がんで自ら放射線治療を選択し, 初めて放射線治療を行う患者を対象とし, 半構成的面接を行った. 面接内容は質的帰納的方法を用いて分析した. 【結　果】 [手術と放射線治療の特徴を知り放射線治療を選択][放射線治療の副作用の出現に対する不安] などの 5 つのカテゴリーが抽出された. 対象者は, 手術をすることで声が出なくなってしまうことや, 気管切開をした場合に仕事に影響を及ぼす可能性があることから, 価値観やボディイメージの変調が懸念されたため, 放射線治療を選択していた. 【結　語】 対象者は治療の特徴や副作用について理解し, 治療に望んでいることが分かった. 治療選択の経緯について知ることによって, 患者の生活や価値観を知ることが出来, そのことをふまえて看護介入することが重要である.

6．前立腺癌密封小線源療法における看護の統一を図る ―看護手順チェックリストの作成―

宮田　和美，掛川　幸恵，井上理英子
中澤　晴美，櫻井　通恵，丸山　公子
（群馬県立がんセンター　4 階東病棟）

【目　的】 当院では全身麻酔下による前立線癌密封小線源療法を行っている. 看護師は治療の専門知識と全身麻酔管理を含む周手術期の看護も必要となるが, 既存の看護手順では詳細な記述がなく業務が繁雑となっている. そこで前立線癌密封小線源療法の看護手順を明確にすることで介助する看護師が統一した看護を提供できると考え看護手順チェックリストを作成した. 【方　法】 1. 既存の看護手順と業務の見直し, 2. 先行研究を参考に看護手順チェックリストを作成. 【結　果】 当院における前立線癌密封小線源療法の看護手順チェックリストを作成したので報告する. 【結　語】 今後このチェックリストを実際に使用し評価・検討をしていく.

7．初めて放射性ヨード内服治療を受ける患者の症状と気持ちの分析及び看護介入の検討

楢原　愛美，井上エリ子
（群馬大医・附属病院・北 6 階病棟）
中島　陽子
（群馬大学重粒子線医学研究センター）

【目　的】 初めて放射性ヨード内服治療を受ける患者の症状と気持ちの推移を分析し, 治療を受ける患者に有効な看護介入方法を検討する. 【対象と方法】 甲状腺癌の患者に対して半構成的面接による質的帰納的分析と, 症状チェック用紙を用いて治療に関連する症状や気持ちの経時的変化を観察した. 【結　果】 治療前の面接では,〈治療に伴う変化への恐れ〉〈初めての治療への挑戦〉等 7 つのカテゴリーが抽出された. 治療後の面接では,〈ヨード内服後の症状の辛さ〉〈治療結果への安心感と今後の不安〉等 7 つのカテゴリーが抽出された. 治療期間中は, 投薬日当日に一時的な嘔気の増強と, 投薬日二日目以降持続的なのどの違和感と耳下部の疼痛がみられた. 【まとめ】 治療中の具体的なイメージ作成のためにオリエンテーションの充実が重要であること, 治療後は症状の辛さや今後の生活について退院後の精神的フォローが必要であること等が示唆された.